



令和元年 7 月 25 日

## 「がん患者だって子どもを持ちたい」 生殖機能温存・妊孕性温存についてのがん患者向けパンフレットが完成

### ◆発表のポイント

- ・がんの化学療法や放射線療法により、将来、子どもを持つための能力（妊孕性）が低下してしまうことがあります。このため、がん治療前に精子や卵子、卵巣などを凍結保存しておく「生殖機能温存・妊孕性温存」が行われています。
- ・その可能性と限界を知ってもらうため、「がん治療を受ける患者さん」へ向けての冊子を作成しがん診療を行う医療施設への配布を始めました。

女性が妊娠するには、卵巣や子宮が重要な役割を果たします。また、男性が子どもを持つためには、精巣の中で作られる精子が必要です。がんの治療である化学療法（抗がん剤治療）や放射線療法を行うと、これらの妊娠に必要な臓器がダメージを受け、機能が低下してしまう場合があります。

これからがんの治療を受ける患者やそのご家族は、がん治療のことで頭がいっぱいとなり、将来の子どものことまで考えられないかもしれません。しかし、生殖医療技術の発達とともに、卵子・精子・胚（受精卵）の凍結保存や、卵巣自体の凍結保存により、生殖機能・妊孕性を温存することが可能になっています。

近年、医学の進歩とともに、がんを克服し、その後に子どもを持つことを希望する方々が増えています。もちろん、生殖機能温存・妊孕性温存の方法にも限界があり、全てのがん患者が行うことができるわけではありません。しかし、このような方法があること自体を知らないまま、妊孕性を失ってしまったことを後悔する方もあります。

今回、岡山大学病院リプロダクションセンター、岡山大学大学院保健学研究科では、がんの治療に向かう患者とご家族のために、パンフレット「**将来、子どもを持つことについて知りたい方とその家族へ がん治療の前に知っておきたい生殖機能温存・妊孕性温存治療のこと**」を作成しました。がん診療を行う医療施設への配布を始めています。

このパンフレットが、生殖機能温存・妊孕性温存について知るきっかけとなり、悔いなくがん治療に向かうこと、また、一部には、がん克服後に子どもを持つことにつながればと思います。また、がん治療に関わる医師や看護スタッフにも、がん患者の妊孕性温存について知っていただければと思います。

### ■配布資料

- ・「将来、子どもを持つことについて知りたい方とそのご家族へ  
がん治療の前に知っておきたい 生殖機能温存・妊孕性温存治療のこと」パンフレット



## PRESS RELEASE

### ◆研究者からのひとこと

岡山大学病院リプロダクションセンターでは、がん患者の妊孕性温存治療を行うとともに、この治療を広く知っていただくための活動をしています。

この冊子は、岡山県妊孕性温存治療に関する研修事業と岡山大学SDGs（持続可能な開発目標）推進事業の助成により作成しました。



「がんと生殖医療ネットワーク OKAYAMA」代表  
岡山大学病院リプロダクションセンター センター長  
岡山県不妊専門相談センター センター長

中塚幹也

#### <お問い合わせ先>

岡山大学大学院保健学研究科 中塚研究室 教授  
岡山大学生殖補助医療技術教育研究（ART）センター  
中塚幹也  
（電話番号）086-235-6538（FAX兼）



岡山大学は、国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」を支援しています。